土地

パク キョンリ
朴景利

5

安宇植 訳

福武書店

土地

パク キョンリ
朴景利 5

安宇植 訳

福武書店

土地 5

一九八三年九月二六日　第一刷印刷
一九八三年九月三〇日　第一刷発行

定価——一一〇〇円

著者——朴景利
訳者——安宇植
発行者——福武哲彦
発行所——株式会社福武書店
東京都千代田区麹町六—六　〒一〇二
電話(〇三)二三〇—二二三二
振替口座(東京)六—一〇五〇九七

印刷・製本——大日本印刷株式会社
© PARK KYUNG RI 1983
シリーズ・コード ISBN4-8288-2041-8
土地2コード ISBN4-8288-2076-7 C0093
落・乱丁本はお取替え致します

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

土地5——目次

第三篇　終末と発芽

3章　お救い下され　8
4章　渡し場　25
5章　騒ぎが起こるという噂　44
6章　殺害　67
7章　農民は悲嘆にくれる観客　90
8章　心証　109
9章　発覚　133

10章　殺人犯の息子たち　155
11章　救済された霊魂　174
12章　牛車に揺られて来る少年　196
13章　れんぎょうを手折って　216
14章　斜陽の挽歌　234
15章　帰ってきた七星の女房　258

装丁　菊地信義
カバー絵提供＝韓国文化院

土地

5

第三篇　終末と発芽〈承前〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

3章　お救い下され

ふたたび智異山へやってきた崔致修（チオエチス）はひと月近くも彷徨を重ね、もはやこの山では足を運ばぬところがなかったほどであるが、二度と九泉（クチョン）（環）の姿を見つけだすことはできなかった。

たとえ生命を失うことになろうと決して逃げこむまいと心に誓い、歯をくいしばって耐えてきた環は牛観（ウクワン）禅師を頼って、俗世に生きる身であれば伯父と呼ぶべき老沙門に救いを求め、鷲谷寺（ヨンゴクサ）へと逃げこんだのである。

ふとした拍子に風に飛ばされた一粒の松の種が、切り立った切り岸の断面に運ばれて芽吹く。こうして孤独のうちに生い育つことになるその松の木は、開かれた場所とてない屏風のようにめぐらされた稜線に太陽が昇り、月が昇って、その太陽がふたたび落ち月が沈んでいくさまを眺めながらも、その稜線の外に広々とした天地が開かれ、そこでも太陽が、月が昇っては沈んでゆくことを知らない。環は切り岸の断面に運ばれてきた一粒の松の種、切り岸の断面で孤独のうちに生い育った一本の松の木にもひとしい少年であった。生い育つにつれ、季節とともに変化を遂げていく木立ちのざわめき、遠い彼方からのけものらの足音、鳥類の羽音、さまざまな草木や山の花々から吐きだされる香気、空から手招きする虹などの精を追い求め、汗を流し、眠り、そして夢を見てきた。

山の外に世界があり、そこでも太陽と月とが昇っては沈んでいく事実を知るようになったのはある夏のこと、寺を訪ねてきた男にともなわれて森の小径を抜け、山から降りてとある酒幕（ジュマク）（居酒屋）に泊まるようになってからである。鋭い眼を輝かせ、注意深く少年の姿に視線を注いだその男は、少年環の実の父親だと名乗った。東学の群れをあまた率いてまわった父。その父に影のごとく寄り添って歩いた環は東学の乱に加担して凄惨な戦さの終局を見届け、父を刑場に喪った。数百里にも及んだ環自身の逃避行も重畳たる山々と茨の道の連なりであった。環が覚ったのは、屏風をめぐらしたような深山の奥を照らす太陽や月と、山の外の広々とした世界を照らしている太陽と月とがおなじではないことであった。それだけではない。深山は冷たく静かな月の世界であり、山の外はぐらぐらと沸き返る太陽の世界であること、一方には幻にも似た寂寞たる平和があり、他方には苦悩に身を震わせねばならない現実が存するということであった。

——恨みに思うてはなるまい。億万の衆生ことごとくがそうなのじゃから。恨みに思うことさえなければ、苦痛は喜びに転ずるであろう。

牛観禅師はそういって訓したことがある。

環は山を、平地を行く者よりさらに早く歩くことができた。身を隠すすべの巧妙さ。追手の臭いを山のけものたちとおなじくらい嗅ぎ分けることができた。しかし追われる身は、それがいつ終わるとも知れないだけに息苦しいものである。追手に先んじて走らねばならず、休息は許されない。けれども彼には、山を脱けだしはるか彼方の、人びとの住む村里へ降りて行く勇気はなか

った。

宿命的ともいうべき彼の成長とそれにともなう艱難とは、いつしか彼に不幸な流浪の習性を育てさせる結果にもなったが、彼の体内に流れる血にはすでに孤独な、それがどこであろうと定着を許さぬ何かがあったように思えてならない。秩序があり平穏に見える村里は、どだい彼が腰を落ち着けるにふさわしいところではなかったのである。平地へ降りてしまうと陸へ上がった河童も同様に、山歩きで鍛えられてきた脚は萎えていくであろうし、身を隠す知恵も役に立たなくなるに違いなかった。栗鼠が懸命に輪の中を走るような日々を過ごしながらも、彼は山を脱けだす勇気をもつことができなかった。仮りにも独り身であったならば、たとえ渓流の端や岩場の陰で行き倒れのまま死を迎えることになろうと、彼は牛観禅師に救いを求めたりはしなかったろう。すっかり怯えきっている別堂の若奥様は、いまやほとんど半狂乱の状態にあった。眠らずにいるときでさえうわ言をいい、物の影に怯えては切り岸へと走りだしたりした。環もまた死によってあがないうる休息を、死に至るまでの恍惚とした瞬間を思わせる終末を心に思い描き、熱望し、いつしかうわ言を口走るまでになっていた。

凍てついた大地を踏みしめ、雑木林から洩れて来る木蒐の啼き声に追われるようにして鷲谷寺の山門をくぐった環は、衰弱して燃えるように熱い別堂の若奥様の手を握りしめながら、牛観禅師の前に進みでた。

「お救い下され」

石燈籠の明かりが斜めに地上に光を落としていたから、その光の加減で牛観禅師の影が夜空にそびえ立つ塔身のように見えた。黒ぐろとした木立ちの翳を背にして牛観禅師は立っていた。

二筋の眼光が環の眼面に注がれてまじろぎ一つしなかった。牛観禅師の姿がいよいよ大きくなり、さらにまた巨人のようになってゆきついには視界を覆い尽くし、やがてその全身は見えなくなった。それとは対照的に別堂の若奥様の姿はますます小さくなっていくようで、手の中に握りしめた彼女の手が、火の玉のように熱い手が手ではない女の体のすべてのようになり、仕舞いにはそれすらもが煙となって消え失せてしまうような幻覚。

両脚を折り曲げ、環はその場にひざまずいた。

「この女性(にょしょう)をお救い下され」

牛観禅師はおもむろに背を向けた。手招きした。僧衣を夜風になびかせながら年老いた沙門は先になって歩みはじめるのであった。

崔致修は九泉が安全な場所へ落ち延びたことを覚った。

——ご辞退つかまつる。愚僧が引導を渡さねばならぬ、そのような非命の死を遂げるべき男などおりますまいからな。

牛観禅師の言葉が思いだされた。予期しなかったことではなかったから、いまさらそれに気づいたというにはあたらなかった。すでに秋夕(チュソク)(陰暦八月十五日、祖先に対する祭祀や墓参りの節日。仲

秋節ともいう）をひかえて山を降りる際、それが追跡の手を緩めてやることになるものと承知していたし、追われる身の彼らに逃げ道を開いてやり、安全な避難所を用意させることにもなると考えないではなかったのである。したがってひと月ほど山を降りている間に牛観禅師が手をまわし、彼らを救いだしたであろうことは想像にかたくなかった。

では致修は、なぜ山へ戻ってきたのであろうか。またしても彼は、偶然に期待をかけているのであろうか。世間の眼を恐れる彼ではなかったから、祖先の霊に対して敬虔な感情を抱くほど殊勝な致修でもなかった。したがって秋夕の物日に、祖先の霊前に一杯の酒を供えるため下山したなどということは、とうてい不可避の理由にはなりえないことになる。それはそれとして、九泉らはすでに安全な避難所へ落ち延びたものと察しをつけながら、雪に覆われはじめた山にはなぜ踏みとどまっているのであろうか。

山へきて十日をかなり過ぎた時分、衣服と食糧を届けにやってきた乭（トル）が、山には雪が降り積もっていることだろうし寒さもひとしお厳しかろうから、早々に帰宅するのが望ましいという尹（ユン）氏夫人からの言葉を伝えた。崔致修はその勧めにしたがうとは答えなかったし、また下山することなど考えてもいなかった。このような主人の不可解な態度を謎として、それも恐るべき力、いつ爆発するやもしれぬ力を秘めた謎と感じながら来る日も来る日も仕えていた寿童（スドン）は、内心では戦戦兢兢としていた。ひっきりなしに頭をもたげて来る妄想は気も狂わんばかりに彼を責めさいなんだ。金書房（キムソバン）（書房は、～さんの謂）ほどには臆病ではなかったが、しかし寿童は元来が神経の

か細いほうであった。致修は予期に反して、屋敷へ帰ってからも寿童に何ら罰を加えようとはしなかっただけか、九泉に危険を知らせて難を逃れさせた彼の振舞いを、改めて咎めようとする気配すらうかがわせなかった。こんどふたたび山へでかけて来る際にも、腕っ節の強い奴僕たちをさしおいて致修はまたしても、寿童にしたがうよう命じたのである。このように謎めいて見える主人の傍を離れることもかなわず苦痛をしいられる一方で、寿童は山が、雪に覆われてひっそりと静まり返っている山がひどく恐ろしかった。致修と山、致修ゆえにいよいよ山が恐ろしく思われ、ひっそりと冬の装いをととのえていく山ゆえにより致修を恐れたのかもしれなかった。それは、自分の背信行為に対していつ加えられるともしれない苛酷な処罰への恐怖とは、性質を異にする恐怖のようであった。もとよりときには、致修の狂気が爆発し、九泉に向けられたように銃口が自分の胸元に突きつけられるに違いないという、あるいは雪に覆われた谷底へ突き落とされるに違いないという妄想に捕われ、たびたび身を震わせないではいなかったが、たいていは、寿童の心の底からもやもやと霧のように湧き起こるその恐怖心が何に根ざしたものであるかに気がつかずにいることのほうが多かった。ときには自分が、地獄のとある路地をとぼとぼとたった独りで歩いているように思われたし、またときには、鳥類すら死に絶えた天地が真っ赤な汚泥の中に沈んでいき、その汚泥の中で寿童ただ独りがもがいているようにも思われた。またときには、剣を振りかざした見上げるばかりに大きな、鉄製の甲冑を鎧った武将、それも幾百幾千もの武将たちの真っただ中へ自分だけが投げだされているようにも思えたし、さらにまた、ときには、求礼の

廉書房のところで見かけた娘が丸裸になって、まるで火田民の山小屋の庭で叩きつぶした百足さながらに体をくねらせ、自分にねっとりと絡みついて来るように思われるのであった。ところが、はっとわれに返ってみると、四囲は山であり、松の枝にずっしりと降り積もった雪が風に舞い上がる光景であり、そのうえいつもと変わらぬ、謎をふくんだ崔致修の歩きまわる姿が眼に止まるのである。ひょっとしたらこれは、長期にわたる寿童の禁欲生活がもたらした、神経衰弱によるものではなかったろうか。いずれにせよ極度の孤独による病いかもしれなかった。けものたちの場合も、いや取るに足らぬ鳥類でさえ交接への本能ならぬ孤独感によるだけでは病んで息の絶えることがあり、鳥類と水中の魚類とが互いに深い友情を分かち合うという事実も、孤独感がいかに恐るべき病いであるかを物語るものであろう。もとより寿童は、自分が病んでいるとは思ってもいなかった。孤独であるから病んでいるとはなおのこと思ってはいなかった。いわば一種の神経衰弱に罹っているわけであるが、女房の粉を喪くしたころ崔参判邸へ紛れこんできた九泉の存在が彼にとって思いのほか大きな比重を占めていたのは事実で、ときには兄のような、またときには父親のような気持ちで九泉に眼をかけてきたことは、孤独な彼にはまたとない慰藉であったに違いない。それだけに九泉を失った虚しさは、当人でさえ気がつかぬほどの大きな哀しみであったに相違なかった。しかし、同時に、何よりも奴僕としての倫理、こんにちまで自分を支えてきたそれなりの倫理が崩れ去ったところから来る精神的な混乱が、彼の心の底にとどこおっていた孤独感を鎮めようもない状態にまで突き落としたと見るべきであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo